

学道一如

発行
小樽双葉高校
新聞部
2026年9月14日
第31号

バスケットボール部 選手権大会で全道へ

9月6日、バスケットボール選手権大会小樽地区予選会が開催され、本校は小樽潮陵に74-46、岩内・倶知安合同チームに69-65で勝利し優勝。11月に釧路で開催される全道大会進出を決めた。



主将の大竹聖奈さんは「初スタメンの渡邊杷子さん（1-4）が非常に活躍してくれた。2年の熊倉さん、船木さんは怪我を負いながら全力で戦い、安定したプレーしてくれた」と感謝する。今大会の課題を改善し、全道での活躍を誓う。



仏教×SDGs

「食」テーマに
弁当を考案

京都 西本願寺

「縁起弁当」立体的に

杉田真梨菜さん（2-2）は「宿泊の部屋も他校との4人部屋で最初は緊張したが、班（写真）で弁当メニューを考え、皆で役割分担し上手に進められた」と振り返る。それぞれの出身地の名産を弁当に入れた。北海道からは米、焼き鮭、ポテトサラダが入っている。



左から二人目が杉田さん

繋がる「おにぎり弁当」

吉田菜桜さん（2-4）の班は「つながり」を意識したおに

8月25〜27日、龍谷総合学園加盟校が集い、「身近な「食」から考える仏教とSDGs」をテーマにワークショップをして交流した。仏教とSDGs双方の共通点「誰も取り残さない」を合い言葉に地方の「食」を使っているというもので、3名が参加した。



左から二人目が吉田さん

日本列島「秘縁弁当」

ぎり弁当を考えた。それぞれの地域の特産の食材を使った。北海道は焼き鮭、岡山はデミカツ丼、という具合だ。道外の高校生との交流は新鮮だった。方言の違いも感じた。「ゴミを投げる」と言うのと「何のこと」という反応があった。

今山結愛さん（2-3）は「小樽で有名なものをお土産に持つことで、かま栄のパンローリを持っていき、試食してもらったところ「美味しい」と反響があった。班のメンバーは佐賀、福岡、富山、東京、大阪と日本各地から集まっており、日本列島の形に弁当のおかずを置いてみた。各地の名産をということ、北海道はシャケフレイク、富山はブリ昆布巻きだった。作業しながら、沢山話ができて楽しかった」と語っている。



左から三人目が今山さん

戦艦大和の完成から85年

『大和』の沈没と乗組員の生死



波状攻撃に晒された第二艦隊は艦の数を半数に減らしながらも奮戦を続けていましたが、遂に『大和』の排水装置が機能不全に陥り、傾斜復元が不可能になりました。これにより、『大和』の司令部は乗組員への総員退艦を発しました。『大和』と生死を共にしたいのが半分、生き残りたいのが半分』という葛藤により『大和』を離れるのが遅れたそうです。それだけ、『大和』という船に特別な感情があったのです。司令官である伊藤誠一中将は長官室へ戻りましたが、その扉が二度と開くことはありませんでした。『大和』は魚雷が集中した左舷を下にし



対空戦闘中の第二艦隊
手前には駆逐艦 奥には『大和』
が見える

て急傾斜し、右舷甲板には生き残った搭乗員が宙吊りになるという壮絶な光景が広がりました。その後、右舷が海面に激突し、『大和』は転覆しました。その後、第二砲塔直下から大爆発が発生し、坊ノ岬沖の空は赤く染まりました。そして、空からは『大和』の破片が降り注いだため、これが直撃して命を奪われた者が多く居ました。反対に、海中からの爆発の衝撃で海面へ飛ばされて助かった者も居ました。艦は真つ二つとなり、折れた艦首側は海面と垂直になって沈んでいきました。この時の爆発煙はキノコ雲のような形で高く立ち昇りました。『大和』などから流れた重油は海を覆い尽くし、生き残った搭乗員の視界を奪いました。大和搭乗員には「これで生きられる」と思っていた者や「お母さん」と言葉が出てきたと証言する者もあり、現代を生きる私たちには分からない極限状態であつたことを物語っています。『大和』の沈没から少しして、海に浮いていた大和乗組員には疲労度が増してきま



戦艦『大和』の沈没に伴うキノコ雲
駆逐艦が救助作業を行なっている

した。そのため、疲労度を和らげようと『行進曲『軍艦』』を歌ったそうですが、『大和』が沈んだのにそれは如何なものかとなり、それからは童謡を歌ったそうです。大和搭乗員は随伴していた駆逐艦に救助されましたが、一部の者は救助されなかったり、安堵から救助前に気を失ったり、他の者に捕まったことでも、共に沈んだり蹴り落とされたりして溺死する者も多く居ました。この時、航行可能だった第二艦隊の艦艇は4隻であり、その内の駆逐艦『涼月』は艦首が脱落した状態でしたが、なんとか本土へ辿り着くことに成功しました。こうして、世界最大最強と謳われた戦艦大和は戦艦同士の艦隊決戦を行うことなく、航空機によって沈められたのでした。大和乗員は対空兵装の強化により3332名が乗艦しており、その内の3056名が戦死しました。この海戦は大艦巨砲主義と日本海軍の終焉を象徴する出来事でした。



海上自衛隊 護衛艦隊

海軍最後の仕事

天号作戦で『大和』を喪失した海軍には、戦艦や空母を含む有力な戦力が残されていましたが、乗員と燃料の枯渇や米軍による海上封鎖で、既に艦隊を編成する余力はありませんでした。また、海軍施設のある地域では空襲が激化し、停泊していた艦は対空戦闘で応戦しましたが、その殆どが戦闘不能に陥りました。各地では小型艦による奮闘が続いていましたが、戦局を開することはできず、徐々に数を減らして行きました。そして、広島と長崎に原爆が投下され、日本はボツダム宣言を受諾。長きに亘って続いた戦争に終止符が打たれました。海軍は第二復員省へと改組され、アジア・太平洋各地の日本人輸送に従事することになりました。復員作業には、駆逐艦から空母、旧型巡洋艦など多くの艦が動員されました。復員作業の終了に伴い、復員省は廃止。その後、海上保安庁を経て海上自衛隊へと海軍は継承されて行きました。

大和型戦艦の弱点

大和型戦艦には確かに当時の最新技術が用いられた世界最大最強の戦艦でした。しかし、これは対戦艦の砲戦において最大限に發揮されるものでした。『大和』『武蔵』の戦艦として建造された2隻は、航空機との戦闘により沈没しました。三番艦の『信濃』は潜水艦による攻撃で沈没しています。『信濃』は未完成の状態であり、問題点が多くありましたが、この大和型を沈めた一番の要因は魚雷です。魚雷とは魚型水雷の略称で、水中で推進し目標物の直前または直撃後に爆発するという兵器です。『大和』『武蔵』には航空魚雷が使用され、『大和』は

10本『武蔵』は20本の攻撃が命中していました。実は海戦の初期に受けた魚雷攻撃により、重要防衛区画のリベット接続部分に損傷。後続の魚雷によって船体下部が打ち破られるということが発生していました。大和型戦艦は対戦艦を目的としていましたが、水雷防御を決して軽視もしていた訳ではなく、船体下部にもしっかりと装甲が存在していました。大和型戦艦建造当初はそもそも航空機が優勢な時代が来ることも想定外でした。また、当時最先端であった電気溶接は全ての工程で使用された訳ではなく、ほとんどは旧来のリベット接合が主体でした。そのため、大和型戦艦が魚雷に脆弱だったのは日本の技術力の限界だったと考えることができそうです。更に大和型の弱点として指す。更に大和型の弱点として指摘されるのは15・5センチ三連装副砲で、副砲下部は主砲の弾薬庫にも繋がっていました。そのため、副砲に真上から垂直に砲弾が命中すれば弾薬庫の誘爆で爆発沈没する可能性がありました。そのため、後付けで鉄板が施される工事も行われました。実際に、米急降下爆撃により、『大和』の後部副砲塔に500キロ爆弾が直撃し、火災が発生させるという事態が発生しました。この影響で転覆時に第三砲塔の弾薬庫が誘爆しました。しかし、戦艦同士の砲戦において砲弾が垂直に当たることは考えにくく、砲彈自体が命中する確率は低いものであり、副砲を狙うことも難しいため、副砲が弱点であるという事は確かですが、その限りなく低い確率の弱点については考えなくても良いというのが結論だと言えます。

（坂東 元、続く）